工房のすぐ近く、原民的な雰囲気が漂うジャン・タロン・マーケットはお気に入りの場所。ちょっとした買い物の折にも和やかな触れ合いが楽しめるのはモントリオールの魅力のひとつ

上/大きなスタジオを5人のアーティストと共にシェアしている。その仲間のひとりキャロルさんと

下/全体に和の趣を色濃くうちだした関さんの作品。とりわけ、花をモチーフにし、そこに万葉集の詩を描いた「ボエム・プレート」はユニークと評判だ

右/思いついたことは常にメモしておく。ダウンタウンのすぐ近くにある自然公園モン・ロワイヤルにて上/土の感触を楽しみながらロクロを回す。創りながら作品のイメージが膨らんでいくことも多い

Interview

モントリオールには常識なんてない。何かをやりたいと思う心があれば誰でも何でも始められる。

Yukari Hazama Iverson

関由加里さん 陶芸家 39才

1995年、語学研修でカナダ、ニュー・ブランスウィック州に。翌年陶芸を始める。2001年モントリオールに移り本格的な創作活動を開始

モントリオールの静かな住宅街、数人のアーティストと共に借りているスタジオの一角が関さんの工房だ。棚にはお皿やカップなどの作品がズラリと並んでいる。

「温かく素直でセンシュアル。色っぽいっていうのかな、それが私の作品のテーマです」と言うとおり、どれも優しい自然な色合いの陶器ばかり。大皿に万葉集の詩が書かれたものなど、和風テイストの器が中心。

「日本的な『何々焼き』というものではありません。学校でも自分の特色を出すようにトレーニングしてきたし、今も、デザインから釉薬まで自分で研究しながら創っています」

語学研修で滞在していたニュー・ブランズウィック州で芸術家の二主人と出会い、彼の影響を受け陶芸をやってみる気になった。陶芸のテレッジにも通い、カナダ流のアートを基礎から学んだ。モントリオールに移ったのは、御主人の提案だ。

「ここは芸術家にとって過ごしやすい街だから、と」

2001年にモントリオールで本格的に創作活動を開始。すると、芸術家同士、そして人かたへのつながりてゆくと友達や仕事の輪が大きくなっていき、また新しい出会いによって作品の幅も広がっていった。今では10カ所のギャラリーと契約し、夏には120人の作品が集まる「ミル・アン・ポ（1001個のポット）」というイベントにも出品。またモントリオールのクリスマス・クラフトショーにも出品するなど、発表の場は増えている。

まさにご主人が言うとおりに、ここは芸術家がいきいきと活躍できる街だったようだが、関さんは創作活動だけでなく、生活そのものも楽しくて仕方ないという。

「街は面白いし、食べ物もインターナショナル。それにいろいろな国の人がいて、さまざまな人と接しているうちに相手を理解しようと寛容になっていく。物を作る人間は心がオープンでなくてはいけないと思うから、この環境は理想的です」

その中で、関さんは陶芸以外にも興味があることには積極的に足を踏み出している。例えば日系文化会館で行われている『あらし太鼓』にも夢中で、週2回の練習は欠かさず参加しているという。

「カナダでいろんなことに挑戦しやすいんです。年齢とか、経験とか、世間体とかを問われず、やりたい心さえあれば誰でも始められる」

では、そんな関さんがこれからさらにやりたいことは？

「中国の景徳鎮、そして日本でも陶芸を学んでみたい。それから主人との2人展も開きたい。」挙げていったらキリがありません〈笑〉